短編集「雨ーーアメジストの指輪」

とかげのしっぽ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリジナルの短編です。

久しぶりに宮沢賢治さんの「銀河鉄道の夜」を読んだら泣いてしまうぐらい感動して、なにかファンタジーを書きたくなりました。

新しい話を思いついたら、順番に載せていきます。

目　次

雨ーアメジストの指輪 ―― 1
秋のかき氷 ―― 15
ｓｅａ ―― 27
ほうきぼし ―― 41

雨ーーアメジストの指輪

雨…飴玉、アメリカ、アメジスト。

こんな言葉の遊戯をしたことはないですか。初めの文字のふたつだけを連ねて、なにか面白そうな物語を考えるのです。

眠れない夜に、暗闇が風の音さえも飲み込んで、しいんと静かすぎる掛け布団の中で。羊の数を数えるのもいいでしょう。毎日飽きもせずにそれで眠れる人は立派です。でも、ちょっと違うことを試してみるのもいいと思うのです。目を瞑って物語を考えていると、次第に夢想はふくらんでゆきます。海の波が砂浜をさあーッと攫っていくみたいに世界中に広がって、ああ主人公は私自身だった、と気づいた時にはまわりすべてがもう夢の空間なのです。

さて、六月のある晩…何日だったかは、忘れてしまいました。とにかく、あれはちょうど梅雨の時期でした。小糠雨がひんやり窓の網戸から流れてきて、あれえ布団がカビちゃ困るなぁ、なんて思いながら右手だけ伸ばして窓を閉めたのはハッキリ覚えている

のですから。
　ええ、梅雨だからと言って、紫陽花を愛でたりする遊び心は私にはありませんでしたよ。夜ですから外は真っ暗、そうでなくとも金属に縁取られた灰色の窓から見えるのは、隣の家の鉄筋コンクリートだけで緑色の欠片もない殺風景ばかりと決まっているのですから。
　…さあ、そんな夜の夢日記です。ふと適当に思いついた飾り気も何もない題名ですが、案外気に入っています。さあっといきなりふき込んだ時に、枕を少しだけ濡らしてくれましたね。ーーー『雨』

♦？

「おっかさん、外はねぇ、ゴーゴーザーザー物凄い雨だったのよ。せっかく掲げた学校のアメリカ国旗が、千切れそうに捲れ返っていてね。みんながそのまま放っといたから、

もう今頃飛んで行っちゃったんじゃないかしら。」

エヴァが頭のてっぺんからつま先まで、川に飛び込んで泳いできたんじゃないかと思うくらいびっしょりの格好で玄関に飛び込んできて、しかも突然そんなことを言ったのですから。お母さんはもう大慌てでふわふわのタオルを引っ掴み、エヴァの方へ鞠玉みたいに飛んできました。

エヴァを特大のバスタオルに埋めながら、お母さんは太っちょの体をゆらゆら揺らします。

「まあ随分帰りが早かったのねぇ。気のいいスクールバスのおじさんが気を利かせてくれたのかしら。」

「そうよ、そうよ。先生たちがいろいろな所に電話をかけてね。…あ、おっかさんそんなにゴシゴシ拭いちゃ痛いわよ!…それでね、忙しいってくるくる走り回るの、まるでメイプル・ツリーの葉がダンスしているみたいだったわ」

「それは大変でしたねぇ。次に先生方に会ったら、先日はご苦労さまでした、お陰さまでエヴァは無事に家に辿り着けました。ちゃんと、目を見てそう伝えるんですよ」

「分かってまあす。…こうでしょう?」

エヴァがくすぐったそうに体の向きを変えると、お母さんの方にキラキラした紫の瞳を向けました。

「…ね、私の瞳はママ譲りのアメジスト。私はなんだってママにそっくりなのよ。おひさまが照ってる五月の朝が一番好きなところとか、けれども雨の日に窓ガラスをつたう灰色の水も大好きなところとか。クリスマスのキャンディーを何より楽しみにしているのも、八歳のママとまったく同じだったのでしょう？」

「そうですよ。でもね、お母さんはそんなに恥ずかしがり屋じゃあなかったわ。先生に出会ったら、先生が口を開くより前にハロー、とちょうどこんな風にごあいさつしたものですよ」

「…ふうん」

エヴァの水に濡れた金髪が、首筋にぴったりと張り付いてピカピカと光り輝いて視えました。あかあかと紅潮した頬っぺたと、うっすら紫色の唇。さっきまで雨に濡れて冷え切っていた彼女の健康的に肉のついた肌は、もうあたたかみを取り返していたのです。それどころか、カッカと熱を放っているようでした。

突然、お母さんが手を止めました。ちょっとばかりぎゅっと眉根を寄せて、エヴァの頬に手を当て、それから呟くように、険しい声で言ったのです。

「熱すぎるわ。ええ、おかしいわ。」

おかしいわ、おかしいわ、と繰り返しながら、お母さんはエヴァをリビングに連れ出しました。それからエヴァの服をすっかり脱がせると、さっきの倍もあるタオルを新し

く取ってきて、まるでミイラにするかのようなすごい勢いでぐるぐる巻きつけました。もともと分厚いタオルを幾重にも巻いたので、とうとう最後はスノゥマンみたいに膨れてしまいました。

「今、あついチキン・スープをこさえますからね。エヴァはそこの肘掛け椅子で、あったかく、じいっと待ってなさい。…そう、眠って仕舞うのがよいでしょう、きっとあっという間ですよ。」

そこまで言われて初めて、エヴァは自分が高い熱を出していることに気付きました。

確かに、身体中がポッポッと熱いようなのです。体の芯に暖炉があって、焚木をゴウゴウ燃やしているみたいでした。暖炉の火は、雨に濡れて冷たくなったエヴァの指先や唇を溶かして、それでも満足することなくドンドン燃えひろがり、いよいよ熱っぽく踊り狂います。

途端に目の前が霞むような気がしました。それは目の奥がカッカと熱くなって、それから涙が滲み出て来たからでした。エヴァは肘掛け椅子にゆっくり腰をおろすと、はあと一息つきました。風邪を引いたのも何かしら因果関係ならば。きっと急に体を冷やしたりあっためたりしたので、体が吃驚したのでしょう。

エヴァはお母さんの言った通り、このままぼんやり熱っぽい気持ちに身を任せて眠ってしまおうと思いました。

…その時。
雨が叩きつける窓際に、キラリと小さな光が反射しました。うすい紫の雫のような、優しい宝石の光。エヴァが瞳を小さく見開きました。

ーーアレハ、オッカサンノ指輪ダワ。

エヴァは思わず手を伸ばしました。…いいえ、伸ばしたつもりだったのです。何故ってエヴァはタオルにぐるぐる巻きで、親指の一本さえ動かすことは出来なかったはずなのですから。
しかしエヴァは手を伸ばし、そのアメジストの指輪を捕まえて、そおっと手のひらに乗せることが出来たのです。

「ねえ、指輪さん。かあいそうねぇ、窓際に置いてきぼりなんて。本当に綺麗なアメジストなのに。」
エヴァは両の手のひらを、ちょうど水を掬う時のように合わせて口に近づけて、そんな風にささやきました。
ーー違うわ、違うわよ

「……？」

水晶のように透き通った指輪の上にちょこんと腰掛けたうす紫の妖精が笑ったのが見えたような気がして、エヴァは瞬間跳ね上がるように顔を上げました。

…幻でしょうか。

…ええ、ええ。そうに違いありません。

何故って、エヴァは熱が出ているのですから。朦朧として、空気の揺らいだのやら遠くで弟がおふざけに鈴を鳴らしたのを間違えたに決まっているのです。

そう心を納得させて前を見据えたエヴァ。

けれども。やっぱりちょっと気になるのでした。確かめるだけよ、幻だったと確かめるだけなのよ、言い訳のようにそう何度も心の中で繰り返しながら、エヴァはそおっともう一度手のひらに目を落としました。

「…ハロー、エヴァ！　元気そう、とはとっても言えないのねぇ。貴女が風邪をひいたのは何時ぶりかしら。」

エヴァはあんまりびっくりして、今度は手のひらを勢いよく閉じました。パシン、とかなりいい音が響きました。ドックンドックンする心臓が、耳のすぐ後ろに鳴っていま

す。エヴァは息を潜めて、できるだけゆっくりとまわりを見回しました。誰もいません、おっかさんも弟も例え歌を歌っても聞こえないくらい遠くにいるようです……ほんの少しだけ安心してから、エヴァは心を落ち着けて、もう一度手のひらを開いてみることにしました。

「…あら吃驚した。いきなり手を閉じるから、私妖精なのに潰れちゃうんじゃないかと思ったわ。このアメジストの指輪が死んじゃうまでは、私だって死ねないって解ってたのにあらまあおかしいわ」

くつくつ笑って、まるでそこにいるのが当たり前とでも云うように堂々と、妖精がエヴァを見上げました。指輪と全く同じくらいの大きさで、透き通った腕や足は、お裁縫箱の中の針みたいに細い妖精。しかし今にもポキッと折れてしまいそうな体は、案外頑丈なようでした。なぜって、エヴァがさっき勢いよく手を閉じたのにもかかわらず、背中の繊細で美しい羽には傷ひとつついていないのですから。

「あら忘れてた、言いたいことがあったんだったわ。…ねえ、貴女言ったわね。置いてきぼりなんてかわいそうにって。そんなんじゃあないのよ。置いてきぼりって云うのは、そこにあることを忘れられたり、二度と連れて行く気がなかったりする時に使う言葉でしょう。エミリアは、そんな薄情な人ではないんだから。」

…エミリア。エヴァのお母さんの名前です。

「あ、でもねえ、いかにも忘れられた憐れな古品(ふるじな)ですって格好だったのは認めるわ。だって窓際ですもの。おひさまの光に輝いているんならまだ綺麗かもしれないけど、こんな嵐で灰色の曇り日になんて、くすんで見えても仕方ないと云うものでしょう。」

言い終わると、妖精は気どって顎に手を当てました。エヴァが、まあ綺麗だわ、優雅極まりないわ、なんて興奮して熱心に見つめる間に、妖精はフワリとエヴァの手の中を飛び立ちました。そうして宙でタランと一回転して、ちょっと後ろへ行くと窓枠のそばに腰掛けたのです。

「…ねえ、妖精さん」

エヴァは夢見るように囁きました。

「おっかさんは何故に指輪を置いていったのかしら。あのアメジストはねえ、ショッピングで、それともパーティでもいいけれど、とにかくおっかさんが嵌めていないのは見た事がないくらいに大事なものなのよ。うっかり忘れられたんじゃなけりゃ、どうしてあんな場所に置いたのかさっぱり判らないわ」

雨の雫のように透き通った体をもつ妖精が、会ったばかりの時とそっくり同じようにくつくつ笑いました。

「そりゃあもう、雨だからよ。轟々イレクトリック・レイルカーみたいに風が唸って

ねぇ、黒雲がモクモク湧いて地球全部を覆っちゃうような日が来たら、それこそアメジストの最高に輝く瞬間！ああ今からぞくぞくしてきたわ」

随分とおかしなことを云う妖精ねぇ、とエヴァは考えました。宝石が輝くのは、日光の下に、星灯りの下、月灯りや、燃ゆる火のそばに決まっています。アメジストって、はてそんなに不吉な石だったかしらと頭を悩ませるのですが、まったく思い当たる節がありません。

「と云うのもね。太陽の光は強いのよ、何よりも。儚いアメジストなんか一遍に貫かれて、どんどん命が漏れ出してしまうんですから。けれどもねぇ。

ーーはんたいに、雨の空になったなら。」

妖精が一際光り輝き、透明な髪までがシャランと煌めいたように見えました。

「……淡い⊠色が、そばにいる人を慰めるために一層輝くのよ！」

妖精がうれしそうに飛び立ち、渦を巻く小さな虫サイズのハリケーンが其処ら中に光の粒子を撒き散らしました。よくよく見れば、妖精が魔法で巻き起こす旋風の真ん中になにか、金色の粘り糸のようなものが集まっているようです。まるで砂糖を大鍋で溶かした時のベッコウ色のような、…いいえ、まさにそれそのものなのでした。

妖精がケシの粒より小さく細い指をくるりと回します。すると、それに合わせて空中の粘り糸がぎゅっと互いに引き寄せられて、あっという間に小さな小さな飴玉ができあがったではありませんか。

「ほうら、できた。雨とキャンディのおまじない、舌でとろけ喉には潤い、病気の膿を沈めちゃう。さあ召し上がれ、あーん。」

エヴァはなんだか妖精の勢いに呑まれるようになって、口を大急ぎに開けました。

「そうら。」

予想よりもずいぶん優しい掛け声とともに、妖精の魔法の飴玉が舌の上に乗っかりました。

「んぎゅっ」

瞬間、思わずエヴァは目を瞑りました。

…あまずっぱいのです。まるで百万個(ひゃくまんこ)の桃の果樹に囲まれたみたいに、咽せ返るような強い薫り。

ジュワジュワといくらでも滲み出てくる果実の汁が、エヴァの全てを溶かして葬り去ろうというかのようでした。しかし不思議なことに、それら全ては優しく、慈愛に包まれた純粋な愛で出来ているのでした。

……ヴァ、エヴァ

頭のてっぺんから爪先まで、熱い汁が全身を駆け巡って沸騰したかのような感覚が一気に身を震わせます。ああ、眩暈のように世界がぐるぐる回っていて止まりません。エヴァは一層ぎゅっと体を縮めて……

まったく唐突に、全ての味と薫りが消え去りました。

「……エヴァ、エヴァ」

「はっ。……あ、あれ私って今まで…。おっかさん?」

エヴァが目を開けると、なんだかよい匂いが鼻をつうんとつきました。慌てて体を起こすと、目の前から妖精と金色の桃飴は綺麗さっぱり姿を消して、代りにエプロン姿のお母さんが、湯気がもくもくと湧き上がるチキン・スープの鍋を両手に捧げ持っていたのです。窓を叩く雨の音は、幾分か小さくなったようでした。

「エヴァ、起きましたね。そうら、ご覧なさい。よく眠っていたようでしたから、あっという間にスープが出来ましたよ。…お皿に掬いますから、ゆっくり冷まして頂きましょうね。風邪のうちは無理をしないで、一杯だけで我慢するんですよ」

エヴァは、びっくりして言いました。

「……あのぅ、おっかさん。私、なんだかもう治ってしまったみたいなの。」

お母さんはエヴァの顔色を見て、そしてスープの鍋をテーブルにごとんと置いてからあらためてエヴァの頬っぺたに触れました。それからもうエヴァの顔色をもう一度じっくり眺め回してから言ったのです。

「あらまあ、本当に治ってしまったのねぇ。あなたが寝ている間に、一体何があったのかしら。」

それはね、妖精さんがね…、とエヴァは嬉しそうに答えようとして、手に持っていたはずの指輪の感触がないのに気がつきました。それどころか、お母さんに体中ぐるぐる巻きにされたタオルのせいで、手を一寸も動かすことが出来なかったのです。

あれは全部夢だったのかしら、とエヴァはちょっと泣きそうになって、お母さんの方

を振り向きました。

…途端、エヴァはあっとさけぶところでした。

今日はお出掛けの日じゃないのです。ですから、これはいつもだったら起こらないことなのです。ああ、お母さんは何もかもを初めから知っていたのでしょうか。

ーーお母さんの左手のすべすべしたお指に。

あの妖精が守るアメジストの指輪が、紫色にキラキラ煌めいていたのでした。

秋のかき氷

ーーあれはきっと、私が九つの時だったのでしょう。おじいちゃんが目の手術のために入院して、数日の間…正確には二晩と半日だったのですが、おばあちゃんが家に一人ぼっちになったちょうど秋の時節。

お料理のからっきしなおばあちゃんを心配したお母さんが、自分は忙しいのでその代わり、私を送り込みました。私は自分が頼りにされて、ちょっと誇らしげな気分になったのをよく覚えています。ルンルン鼻歌を口ずさみ、行ってきまあす、と元気に赤い靴を鳴らして家を出発しました。

秋の土曜日。優しい風の吹く日、両手にバスケットをさげて歩いたバス通りの景色。全て忘れようとしても忘れられない…大切な思い出です。

♦?

樹里は赤い靴を履いて、両の手には籐のバスケットを提げて、ある家の門扉の前に立ちました。深呼吸で吸って、吐いて、もう一度吸って。そうして意を決して、チャイムに手を伸ばしました。…どうやら錆び付いているようです。樹里は顔を真っ赤にして、両手の親指が痛くなるほどぎゅうぎゅう押し込んで、それでようやく小さなピンポンの音を鳴らすことが出来ました。

錆びているのは、どうやらチャイムだけではありませんでした。目の前の鉄の門扉は、あっちこっちが赤く剥がれているのです。その格子の間からは、草がぼうぼうに伸びた石畳のようなものが見えていました。

お化け屋敷にも見える少し不気味なお家の前で、樹里はごくりと唾を飲み込みました。…もう引き返せません。ここまで乗り継いできた緑色のバスは、明日の朝にならないと帰ってこないのですから。

ーーギイィ、バタン

ドアの開く音。樹里は、思わずピンと背筋を伸ばしました。バスケットをぎゅうっと握り直します。
（…トヨおばあちゃんに、失礼のないようにするのよ。良い子ですねえって、きっと褒めて頂くのよ。）

樹里は祈りました。…どうか優しいおばあちゃんでありますように。まちがっても、子供嫌いの偏屈な人が出て来ませんように。樹里の作ったご飯を、美味しいねえって笑って食べてくれる人でありますように。

いったい、樹里のお祈りは届いたのでしょうか。
ドアの隙間から、ずいぶん小柄な人がひょいと顔を出しました。白髪の優しそうなおばあちゃんが、じろりと樹里の姿を捜してこちらをはたと見据えました。

「…おいで。鍵は空いてるよ」
そっけなくそう言って、おばあちゃんはパタンとドアの向こうに引っ込みました。
なんだか、樹里は肩透かしを食らったようで、戸惑いながら門扉の真鍮の取っ手に手をかけました。

「……お邪魔、しまあす…」
元気よくしようと待ち構えていた挨拶がしりすぼみに小さくなって、樹里は戸惑いながら家の中へ入って行きました。

バタン。
いきなり後ろでドアが閉まりました。玄関は、橙色の柔らかい光に包まれていました。
急に暗いところに入ったので少し怖くなりましたが、向こうの部屋から真っ白な太陽の光が漏れているのを見て、樹里は少し安心しました。
上を見上げると、トヨおばあちゃんの顔がずいぶん近くにありました。
「泊まる道具はあるね。リュックに入れたのは良い判断だ。…それからバスケットを持っているね。旅支度としてはあんまりよろしくない。一体何が入ってる?」
目があった途端に、そんな事を聞かれました。
…いえ、樹里だって確かに荷物について質問して欲しかったのですけれども。もっと

こう、やさしく、興味を持った瞳でバスケットを見てくれると思っていたのです。
樹里は戸惑いながら口を開きました。
「…あのう、お土産です。母さんからは柿が二つ、父さんから、夕食用の牡蠣。それから、一番上の紫のお花は…私がお花屋さんで買ってきたかきつばたです。」
なんだか妙に遠慮してしまって、樹里はできるだけ小さな声で説明しました。
トヨおばあちゃんは、樹里の様子も何にも気にしない様子でズカズカ言いました。
「ふうん。柿、牡蠣、かきつばた。なんだかつまらないね。もっとヘンテコなものくれると思って結構期待してたんだけどね。」
「……私の母さんが、おばあちゃんは季節ものや日本の伝統のものが好きだからって、そう言ったんです。それでてっきり……」
トヨおばあちゃんがジロリとこっちを見つめたので、樹里は急いで黙りました。
おばあちゃんはハアとため息を一つ吐くと、樹里の思ったより案外優しい声音で言いました。
「覚えておきな。何十年も真面目に生きてきたら、馬鹿馬鹿しい事の一つも試してみたくなるもんだ。」
へええ、と樹里が目を丸くしていると、おばあちゃんが続けました。

「ふん。よし決めた。柿も牡蠣もかきつばたも、全部夜に後回しだ。あんたの母さんから聞いてるよ。樹里、あんた天ぷらが得意料理なんだろう、夕食に作る予定だって。…だから昼は、なんか突拍子もないものを食べる。」

…その時樹里は、母さんの言葉を思い出していました。

あの人は掃除も洗濯も、庭仕事も。お料理以外はなんでもできるんだから。そうです、トヨおばあちゃんは、母さん憧れの主婦だったと言います。

しかし、今はちょっと違うようだと樹里は思いました。

五年前に会った時は、いったいどうだったのでしょう。樹里はまだ幼かったので、覚えていません。母さんは、おばあちゃんの変化を知っているのでしょうか。

樹里は不思議な心地でおばあちゃんを見上げました。そうしたら、ここにきてから初めておばあちゃんが嬉しそうな顔で唇を綻ばせ、こんな宣言をしたのです。

「ーーよし、昼食はかき氷だ。」

「え？おばあちゃん？…」

「…あのう、かき氷マシンはあるのですか?」

「ないよ。」

樹里は、どう言ったらいいのかわからずに一瞬口をつぐみました。だって、そうでしょう。お昼ご飯にかき氷。しかも今は九月で、もう薄いカーデガンが必要な季節なのです。

「…ど、どうやって作るんでしょう。」

樹里はやっとの事で、それだけを言いました。

かき氷マシンがなければ、どんなに食べたいと思っても食べられないのがかき氷なの

ですから。
「どうって、氷で作るんだよ。」
トヨおばあちゃんは事もなげに言いました。
…ですから、本当にどうやって作るつもりなんでしょうか。
「ああ、倉庫にトンカチがあるから。取ってきておくれ、エノコロ草がぼうぼうのボロ屋だよ。右の壁見ればぶら下がってるからすぐわかる。」
…まさか。
「と、とんかちで割ったのを食べるんですか。」
「そうだよ。早くしな、昼餉の時間はもう一時間も過ぎてるんだ。」
樹里はとびあがって、ほっぺたを透き通るように青くして、そうして荷物を全部玄関に放り投げると大変に慌てて庭に飛び出しました。
…けれども、しばらくして樹里は手ぶらで家に戻ってきました。
すぐさま台所に駆け込んで、おばあちゃんの姿を探します。
見つけたら、開口一番こう言いました。
「…おばあちゃん。台所の卸し金を使えばきっと簡単ですよ。」

「……あ、なるほど。」

いつもトンカチで氷を割っているのでしょうか？

樹里が戻ってきた時には、トヨおばあちゃんが、やけに手慣れたようすで妙にギザギザの跡がついた氷の塊を木の盤にあけて、ちょうど蜂蜜の瓶を用意したところでした。

どうにも気まずくなって、しいんと静まりかえってしまって……とうとう堪えきれなくなった二人が、いっぺんにふき出しました。

「まあまあ、馬鹿な事をしたいと言っても、頭まで悪くなっちゃ敵わないね。…いや、それはそれで楽しそうだが。」

そんな事を言って頭をかくおばあちゃんに、樹里は言いました。

「おばあちゃん。何故だかさっぱりわからないけれど、今樹里はとっても面白いの。身体中が楽しいって悲鳴をあげてるみたい。人生、今日ここからなんでもうまくいく気分よ。」

二人は笑って笑って、笑い続けました。

そうして、樹里が最初苦手に思ったトヨおばあちゃんも、いつの間にかすっかり良い

人のようになっていたのです。

ようやく笑いを納めたおばあちゃんが、こちらを振り向きます。

「そうさ、あんたの言う通り。人生、うまくいくよ。あんたのアイデアと私の我儘で作り上げるこのかき氷に誓ってね。」

そう、樹里の顔を真っ直ぐに見て、ニヤリと笑ったのでした。

♦？

あの日から数えて、ちょうど十五年目。

おばあちゃんは、死にました。二度と会うことは叶いませんでしたが、私の記憶には艶(あで)やかな燕子花のパープルや柿や貝の牡蠣と一緒に、ニヤリと笑ったあの顔がはっきりと焼き付いています。

そうです。おばあちゃんの言う通りでした。

人生、うまくいくのです。

辛い時は、雪の降る日も油蝉の外で煩く鳴き喚く日も、黙って氷の塊を卸し金ですりおろしました。空っぽの牛乳パックに水を入れて冷凍室に突っ込んで、いつでもトンカチでかち割れるように準備しておきました。

…拝啓、天国のおばあちゃん。

貴方のおかげで、私はどんな時も腐らずに乗り越えられました。

氷の冷たさと蜂蜜の甘さが沁みる日に。

私はいつでも、貴方のあったかい贈り物を思い出します。
私たち家族が贈ったバスケットのお返しは、ちゃんと届けられていたのですね。

ーーありがとう、おばあちゃん。

貴方と私の、一生の思い出。

sea

「あっ痛！」
どたんと何かが重いものが倒れる音。ガシャッという金属の不協和音。松葉杖をついてそろりと一歩を踏み出したタチの、つるりと滑って転倒した音が小さな病院に響き渡りました。
「タチくん！」
慌てて若い看護婦さんが駆け寄りました。床に蹲るタチは声も出せずに歯を食い縛っています。
「…院長先生、早く！」
部屋に駆け込んできた初老のお医者さんが、呼ばれるより前に早足でそばに寄りました。ひどく焦った顔をして、院長先生はやっぱりダメだったと少し後悔しながら、それでも外面上は落ち着いた声で的確な指示を出しました。つまり、骨折が治りかけていた

タチの脚を検査し直すのです。
タチは、すぐにレントゲン室に運ばれて……。

♦？

「はい、足をあげて。ゆうっくり、ゆっくり。太腿から、そうです。」
「いたたたたい！」
「がまんがまん。はい、頑張って。……ほら、どうしたの」
訓練用の車椅子に座って足を上げる練習をしていたタチは、突然唇を横一文字に突っ張って、やおら看護婦さんのいない壁の方を向きました。
「…いやだ。どうせ治りゃしないよ。」
看護婦さんは、びっくりして言いました。
「治りますよぉ。確かに、あなたが初めに入院していたところは、ダメだったかもしれませんね。あそこは整形外科専門じゃあなかったんですから。…言っては悪いですが、治

療費が安くて先生の情が特別厚いだけの、貧乏な病院ですもの。けれどもここは、骨折したところ専門の病院ですよ。リハビリ中に症状を悪化させるなんて失敗は絶対ありません。タチくん。きみの意欲さえあれば、必ず治るんです。」

「(…まさか。たったの一週間で。)」

「タチくん?.やりましょうったら。ねえ?」

看護婦さんはしばらくタチを宥めたりすかしたりして頑張りましたが、タチはただじっと壁を見つめるばかりで何も言いません。とうとう看護婦さんは諦めて、そっとしておいてあげようと決心したのか静かに病室を後にしました。

タチは一人になりました。

途端、じんわり涙が滲み出てきました。

(…ああ、僕はなんてばかな事をしたんだろう。わざわざ石段の八段目に昇って、誰が一番高い場所から跳べるかふざけて競争して。)

悔しくて悔しくて、タチは泣きました。

知っているのです。父さんが悪い奴に騙されて、小さな会社はぺしゃんこに潰れまし

た。借金を返すまで、家族全員が気をつけて節約しなければなりません。それだから、タチが病院に入院できるのは一週間なのです。これでさえもギリギリなのです。

ふわりと風が入ってきてタチの頬にあたりました。

「…タチくん…？　お友だちから、御見舞い品ですよ。わざわざ沖縄からのお届けモノですよ。」

さっきの看護婦さんが戻ってきたのでした。タチは向こうの壁を向いたまま、身動きもしません。

「…ここに置いておきますよ。」

看護婦さんは、静かに出てゆきました。

ーーにわかに、タチが車椅子の向きを変えました。

「……。」

黙って、看護婦さんが置いていった包みに近づいて行きます。小さな机の上を覗き込みますと、茶渋の粗末な紙包が寝ていました。袋は、麻紐でちょうちょ結びに縛ってあります。

包みの隅っこに、小さく差出人の名前が書き付けてありました。

「……あらがき、じゅん……潤?」

タチはびっくりしました。それは小学生の頃、タチが沖縄に住んでいた時に仲良くなった男の子の名前だったのでした。今の今まで、すっかり忘れていた何年も前の記憶なのです。

幼い頃の眩しかった毎日を思い出すと、ふいに懐かしいような、何だか苦しいような心地に駆られて、タチは急いで麻紐に手を伸ばし解きはじめました。するりと紐は解けました。中に詰められていた干し草の塊のような緩衝材をとりのけます。…と、タチはあっけに取られて口をぽかんと開けました。

「…シークワーサー?」

包みの中身はすだちによく似た、沖縄特産の柑橘だったのでした。

みっつの水々しいシークワーサーが、ゴロンと仲良くテーブルに転がり出ました。

「…なぜ、突然に……潤(じゅん)はこんなものを送ったんだろう?」

タチは呆然とシークワーサーを見つめました。そもそも、一体潤は、どうやってタチのいる病院の住所を知ったのでしょうか。

タチはしきりに首を捻りながら、包み紙ごと手で持ち上げてベッドに運んでいきました。

病院特有の真っ白な壁にピッタリくっついたベッドには、まっさらなシーツ。少しの汚れもゆるすまじと綺麗に洗われてある布団の上に、タチは反抗するような気持ちで干し草の緩衝材をぶちまけました。みっつのシークワーサーは、大事に並べてシーツの上に置きました。

「…こっそり一人で食べてしまおうか。いや、少し切れ目を入れて置いておけば部屋に良い匂いが薫るかもしれない。」

タチは車椅子を横向きにベットにつけ片足を床に下すと、ゆっくりと体をずらしてベッドに乗り移り始めました。…本当は看護婦さんの見ている前でやるべきなのですが、呼んでこようとはどうしても思えませんでした。

「うわあっ」

おしりをベッドにつけた瞬間です。

病室に潮風がビュウウッと吹き荒れて、突然ベッドのシーツが真っ白に泡立ちました。タチはあっと叫ぶ間も無くずうんと沈み込んで周りを群青の泡に囲まれました。冷たい泡に揉まれて髪がぶわあっと逆立ちます。

落ちます。落ちます。どこまでも落ちてゆきます。

「くあっぷ、っあぐ」

タチは無我夢中でもがきました。

もがいているうちに、落ちる速さはだんだん遅くなっていきました。だんだん泡は溶けてなくなり、視界がさあっと開けた頃、ついにタチはぷかんと宙に浮かびました。タチは目を見開きました。冷たい夜空のような光景が、すぐ目の前をどこまでも広がっていたのです。

（…あれえ。僕は海に落ちたようだぞ。）

タチはあたりを見まわしてそう思いました。そうです。いつか赤い夕焼けの日に飛び込んだ時の、意外な暗さに驚いた沖縄の浅い海です。ゆらりと珊瑚礁が身をよじって脚に絡みつこうとするのを振り払って、タチはもう少し上の方に向かって泳ぎました。

「ーーハアイ。タチ。」
「やあ、潤(じゅん)。本当に久しぶりだねえ。」

そこら中を赤や黄のカラフルな魚たちが泳いでいるのと全く同じ自然さで、Ｔシャツに短パン姿の潤が……ちょうど別れてから八年分の歳をとった潤が、海の中に浮かんでいました。
ーー八年前と同じ、人懐っこい笑顔。魚みたいに華麗に泳ぐ、近所で一番の素潜りの名人。

タチは、潤がそこにいる事になんの不思議も持ちませんでした。だって、居たんですもの。それだけです。タチは、ただ笑顔を浮かべて語りかけました。泡が口からぶくんと漏れ出します。
「…ねえ。教えておくれよ潤。きみのシークワーサー、どうやって送ったんだい。それに僕はどうして今海にいるの。不思議だな、ちっとも息苦しくないよ。」

タチが問いかけると、ぷかぷか浮きながら潤は目を丸くしました。
「忘れっちゃった？タチ、あのガジュマルとキジムナーさあ。きみにあげた木彫りのシーサー、ずうっとポケットに入れているんじゃないの？」
言われて、タチは急いでズボンのポケットを探りました。
途端、コツンと何か硬いものに手が触れました。出してみると、それは紛れもなくあの木彫りのシーサーでした。

ーーあったのです。あの時にもらったシーサーの木彫り人形が。

タチが驚いて顔をあげると、潤はどうだい、とでも言うように誇らしげな顔で腕を後ろに回しました。
その顔を見ているとタチは何だか申し訳ないような気持ちになって、そわそわ落ち着かなくなりました。何故って本当は、タチはシーサーの事なんかすっかり忘れていたのです。すべて思い出したのはたった今でした。タチと潤はは八年も前に遊んだ時、確かにガジュマルの木のある潤のうちで、キジムナーとプレゼントの交換をしたのでした。
「…僕、失くしちゃったと思ってた。潤もキジムナーも、忘れちゃったと思ってた。」

タチがそう言うと、潤はあからさまに顔を顰めました。
「忘れるはずないさあ。僕たちが、魚好きな妖精のキジムナーのために何時間も釣りや素潜りをして、そのかわりにもらった大切な贈り物じゃないかあ。」
…そう、そうでした。
真っ赤に燃えるような髪をふり乱した妖精が、潤とタチのために彫ってくれた魔法のシーサーです。
『ーーこれで二人は繋がってるんだぁらなぁ。世界の法則なんてぜんぶ吹っ飛ばしちゃうんだあ。』

そう言って、恥ずかしそうに向こうへ走っていった、妖精キジムナー。
魔法の人形だとは、キジムナーは一言も言いませんでした。それでも、潤とタチはよくわかっていたのです。

「オレは、毎日ポケットに入れていたぜ。そうしたら、今日の朝に変な感じがしたのさあ。オレは台所に行って迷わずシークワーサーをとってきた。紙で包んで、縛って、それからポケットのシーサーをぎゅっと握ったらもう　〝道〟　が開いたんだからな。」
「〝道〟？」

「そうさあ。この海がそうだ。オレたちふたり意外には、だあれもいない。八年前の沖縄の海と、なんにも変わってないだろう。」

潤の言う通りでした。

タチは怪訝な表情から一転して幸せそうに笑うと、昔みたいに潤の手を取って泳ごうと平泳ぎに体をくねらせ……

「痛っ！」

突然、右足に鋭い痛みが走りました。

びっくりして顔を下に向けると、タチの足はーー骨折しているので当たり前なのですが、雪のように白いギプスでぐるぐるに巻かれていました。

「ダメさあ、慌てちゃあ。」

潤が笑いながら水中を滑るように泳いできて、くるりとタチに並びました。

「ほうら、水の中はリハビリにはこれ以上ない格好の場所さあ。いいだろう、絶対に転ばない。」

タチには、何だか潤がこっそり訓練の様子をクスクス覗いていたような気がしまし

た。

しかしそんなことはまったく気にしないで、タチは潤の言う通りに、足の動くところを少しずつフィンみたいにゆらし出しました。

「そうそう、時間は無限さあ！夢も希望も海の水とおんなじだけあるんだもんなあ！」

潤は顔中で笑いました。ニカッとこちらを向いてふいに言ったのです。

――だから。ちからぁ、抜いて。頑張れ。

…その言葉が合図だったかのようでした。タチはいきなり臍の内側をぐいっと引っ張られて、あっと叫ぶ間も無く暗闇と泡の中に放り込まれたのです。潤のほうへ手を伸ばして繋ごうとしましたが、もう無駄でした。

もがいて潤の名前を呼ぶうちに、タチの体はどんどん上へ運ばれていって……

「ーーどうだい、眠って気持ちはすっきりしたかなタチくん。」
「…あ…院長先生」

タチはベッドに倒れ込んだ格好のまま、はっと目を開きました。上から立派な白衣の眼鏡のおじさんが、優しそうな笑顔でタチの顔を覗き込んでいました。
タチはゆっくりとあたりを見回します。院長先生の隣には、さきほどの看護婦さんが心配そうに身を小さく縮めながら立っていました。

「きみは、とても気持ちよさそうに眠っていたね。どうかな、リハビリはやる気になったかな。」
「……シーサー」
院長先生の声に被せるようにして、タチは思わず呟きました。

「ん、何か言ったかい。」
院長先生の声も耳に入らず、急いで病院着のズボンのポケットを探ると……ありまし

た。ゴツゴツしているのに何だか優しい、木彫りのシーサー。キジムナーのシーサー。

ぽろりとタチは涙を落としました。

ぎゅうっと小さな木の塊を握りしめます。潤（じゅん）は沖縄に、キジムナーも沖縄に。それでも、みんなあの広い海でひとつに繋がっているのです。

――夢も希望も、海の水とおんなじだけ。

突然タチは顔をあげて、元気よく院長先生に言いました。

「やるよ、リハビリ。僕、一週間で松葉杖なしで歩けるようになってやるよ。」

タチの宣言に、院長先生も看護婦さんも、なんだかほっとしたように肩を落としました。

ミンミンゼミの鳴き声が、急に風に乗って窓から流れ込んできました。夏の病院に、シークワーサーの香りが静かに広がっています。

ほうきぼし

ほうきぼしは、真っ白な火の尾をひきながら、今日も銀河の海を元気に駆け回っていました。ほうきぼしとは名前のとおり、体のはじっこで燃える光がまっすぐにのびて、ほうきのしっぽみたいに光り輝くのです。本当にゆかいな旅でした。ときどき、流れ星の子供たちが何百も何千もかわいらしい笑い声を沸かせながらドオッと横切っていくときなんかは、ほうきぼしも一緒になって笑ってしまうのでした。

ですから今日もいつものように、口笛を吹きながらミルクの天の川を滑ったり、海中でちゅうがえりを五回もやって得意げに格好をつけたりとゆかいに遊んでいたのですが、ふとほうきぼしは不思議に思いました。

（ボクはなぜに、いつも光っているのだろう？）

しっぽをあかあかと燃やしながら、ほうきぼしは考え込んでしまいました。

（燃やしたら、ボクの体はちいさくなっちゃうじゃないか！）

それでも、自分は明るく光っていなければならないのだと、ほうきぼしは知っていました。そう、みんなに言われてきたのです。自分のお父さんとお母さんだって、いつも

火の玉みたいに輝いてうれしそうにしていました。……でも、いったいなぜでしょう？

いくら考えても分からないので、ほうきぼしは誰かに聞いてみることにしました。まずはじめに、いつもメガネをかけて本を読んでいる、賢そうなかじき座のお兄さんのところへ行きました。

「なんでも知っているかじき座のお兄さん。聞きたいことがあるんです。」

そう声をかければ、かじき座は何やら難しそうな文字でびっしり埋まっている本に目を向けたまま、めんどうくさそうに返事をしました。ほうきぼしは一生懸命に言いました。

「ボクは、なぜに光らなければならないのでしょうか？」

「それが、義務だからだ。」

と、かじき座は言いました。

「ぎむって何ですか？」

「…絶対にしなくてはならないことだ。つまり、ほうきぼしは必ず光らなければならないのだ。」

「どうして？」

「危険だからだ。」

おもおもしくかじき座が言って、それではなしは終わりでした。それからは、うんともすんとも返事を返してくれません。ほうきぼしは諦めて、次のところへ行きました。

「いつも青くからだを輝かせているイルカ座さん！ぜひとも聞きたいことがあるんです。なぜにボクは光る義務があるんですか？」

ゆうがなジャンプで泳ぎさろうとしたイルカ座を寸前で呼び止めて、ほうきぼしは息せききって聞きました。

「危ないからよ、坊や。」

と、イルカ座はやさしく言いました。

「どうして？」

「ここの銀河は暗いからね。ずうっと夜の世界だ。」

ほうきぼしはなおも聞こうとしましたが、あっというまにイルカ座は行ってしまいました。

気をとりなおして、ほうきぼしは銀河の海をめぐり出します。行く途中、とびうお座に出会いました。とびうお座にもたずねてみようと思いましたが、それは叶いませんでした。小さなほうきぼしをちらりとみてばかにしたようにふんと息をつくと、ほうきぼ

しが口を開こうとするよりも前にチャチャチャッと翔びさってしまったからです。
　ほうきぼしはビューンと波うちぎわまでとんで行くと、銀の砂の上でもぞもぞ潜り込もうとしていたかに座にも声をかけてみました。
「ボクが光るのはなぜでしょう？　この銀河がいくら暗いったって、いつも海ホタルくんたちの出す銀の粉でぼうっと明るいじゃあないですか。ライトをピカピカに灯さなくても、ちゃんと見えますよ。誰かにぶつかったりしませんよ。」
　かに座はフォッフォッと笑いました。
「それでも、危ないのじゃ。ほうきぼしのこぞうよ。」
　そして、さっと砂に黒々とあいた穴の中へすがたをけしました。
　ほうきぼしは悲しくなりました。たったひとりで銀河の海を旅するチビこぞうに、誰かがしんせつに教えてくれるでしょう。誰もいませんでした。
（こうなったら、光るのをやめてしまおう。）
　そうほうきぼしは決心しました。生まれてこのかた、一度も絶やしたことのない火の尾を、ふっと消したのです。あたりが静かに暗くなりました。だんだんと、ぼうっと天の海をおおう金の霧や、遠くでながれぼしの子供たちがかけて行くピカリといっしゅんの光などが見えるようになってきました。
　そうして、静かな興奮とともに、ほうきぼしはすべり出したのです。

（見えるじゃないか！こんなに銀河ってうつくしい世界だったなんて…ああ、ボクは知らなかったよ！）

しかし、機嫌の良いのも長続きしませんでした。とつぜん誰かに呼びとめられたのです。

「おい、そこのほうきぼしの坊…そうだ、お前を呼んでいるのだ。この永遠の夜にライトをつけないとは何ごとか。」

驚いてふりむくと、そこにはほうきぼしの何倍も大きな体をうねらせた、うみへび座がいました。そこなしの井戸よりもっと深くまっくらな眼が、瞬きもせずにじいっとほうきぼしを見つめていたのです。

「う、うみへび座さん。…じつは、その。ボクが光らなければならない理由を教えてくれないでしょうか。」

ほうきぼしはすこし怖かったのですが、一生懸命にがまんして言いました。すると意外なことに、うみへび座はきちんと説明してくれたのです。まず、ながいながい体をくねらせしっぽのさきに何かをすくいあげるような格好をしました。うみへび座のキラキラ光る鱗の上には、はじめ何もないように見えたのですが、そのしっぽがほうきぼしの顔に近づけられるにつれてだんだんと見えてきました。

「海アメンボくん！」

ふわ～ん、とうみへび座のしっぽの上でちいさなーーほんとうにちいさな虫がはねました。思ってもみなかった出会いにびっくりしたほうきぼしへ、うみへび座はしずかに語りかけました。

「こういう生き物のために、おまえは光るのだ。自分がまわりを見るためではない。ほうき星が通るから危ないぞと、他の生き物へあかるいライトで注意を呼びかけるためなのだ。」

〝見る〟ためではなく、〝見てもらう〟ため。

ほうきぼしは、不思議な気分になりました。そんなこと、考えたこともありません。でも言われてみれば、たしかにそのとおりだったような気がしたのです。ほうきぼしは、ようやくなっとくしました。

「どうもありがとうございました、うみへび座さん！」

お辞儀をして、親切なうみへび座とわかれました。

ほうき星は、幸せそうにまっ白な火の尾をあかあかと燃やし、今日も銀河の海を元気にかけまわるのでした。